

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1119 号	氏 名	上 原 将 志
論文審査担当者	主 査 杠 俊 介 副 査 角 谷 眞 澄 ・ 本 郷 一 博		
(論文審査の結果の要旨)			
<p>思春期特発側弯症 (adolescent idiopathic scoliosis ; AIS) 術後に椎弓根スクリュー (pedicle screw ; PS) 周囲に緩みが生じる症例があり、緩みによる矯正損失や骨癒合不全が懸念される。高齢者や骨粗鬆症患者における腰椎固定術後の PS の緩みに関しては報告が散見されるが、AIS 患者における PS の緩みに関する調査はほとんどなされていない。上原らは、AIS に対する後方矯正固定術における PS の緩み発生とその危険因子について検討した。</p> <p>術後 6 か月の CT 冠状断・矢状断像で PS 全周性にクリアゾーンが認められるものを緩みと定義した。また術後 CT で内外側、頭尾側、前方への PS 逸脱を調査し Rao の分類に基づいて Grade 0~3 に分類した。Grade2 及び 3 を major perforation と定義した。PS 緩みを反応変数、緩み関連因子候補を固定効果、個人を変量効果とした混合ロジスティックモデルを用いた単変量及び多変量解析を行い、PS 緩み関連因子を同定した。</p> <p>その結果、上原は次の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">1. AIS 手術において計 1624 本の PS が挿入され、43 本 (2.7%) に緩みを認めた。2. 単変量解析で患者因子の年齢、性別、術前 Cobb 角は PS 緩みと有意な関連を認めなかった。3. 多重ロジスティック混合モデルで逸脱無しまたは minor perforation (G0, G1) に対して major perforation (G2, G3) における緩みのオッズ比は 17.2 (95%信頼区間 : 6.9-49.6、$p<0.01$) で major perforation で緩みやすかった。頭尾側固定端における緩みのオッズ比は 73.4 (95%信頼区間 : 13.3-1437.6、$p<0.01$) であった。 <p>これらの結果より、AIS 手術の際に固定端の PS が 2mm 以上の逸脱であった場合、PS の緩みが生じる可能性は非常に高く成績不良につながる可能性があるため、注意深い経過観察が必要であることが示唆された。よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			